

昭和53年度（問 題）

1. X_1, X_2, \dots, X_n を、一様分布 $U(0, 1)$ に従う独立な確率変数とし、

$$Y = \min\{X_1, X_2, \dots, X_n\}, \quad Z = \max\{X_1, X_2, \dots, X_n\}$$

とする。

(i) Y および Z の確率密度関数を求めよ。

(ii) Y および Z の平均値を求めよ。

2. $N(\mu, \sigma^2)$ の平均 μ に対する信頼係数 α の最短信頼区間を求めよ。ただし、 σ^2 は既知とする。

3. 既知の分散 σ^2 をもつ正規母集団の母平均の検定において、標本平均値と仮説平均との相違が $\sigma/4$ 以上になったとき仮説をすてるという検定を行う。有意水準 5% 以下でこの検定を行うには、標本の大きさを最低いくつにすればよいか。

(注)

$$\frac{1}{\sqrt{2\pi}} \int_0^{1.96} e^{-\frac{x^2}{2}} dx = 0.475$$

4. 連続的な分布をもつ母集団から大きさ n の標本 (x_1, x_2, \dots, x_n) をとり、これを大きさの順に並べて $y_1 \leq y_2 \leq \dots \leq y_n$ とする。 $2r < n$ のとき、区間 (y_r, y_{n-r+1})

は、母集団メジアン θ の信頼係数 $1 - \frac{1}{2^{n-1}} \sum_{k=0}^{r-1} \binom{n}{k}$ の信頼区間となることを示せ。

5. μ は既知で σ^2 は未知の正規母集団 $N(\mu, \sigma^2)$ から大きさ n の標本 (x_1, x_2, \dots, x_n) が得られたとき、 σ^2 の最尤推定値 $\hat{\sigma}^2$ を求めよ。また、その不偏性を示せ。

昭和53年度（解答例）

$$\begin{aligned} 1. \text{ (i) } P_r(Y \leq t) &= 1 - P_r(Y > t) \\ &= 1 - P_r(X_1 > t, X_2 > t, \dots, X_n > t) \\ &= 1 - \prod_{i=1}^n P_r(X_i > t) \quad (\because X_1, X_2, \dots, X_n \text{ は互いに独立}) \\ &= 1 - (1-t)^n \quad (\because X_1, X_2, \dots, X_n \text{ は一様分布 } U(0, 1) \\ &\hspace{15em} \text{に従う}) \end{aligned}$$

よって Y の確率密度関数を $f_Y(t)$ で表わすと、

$$f_Y(t) = n(1-t)^{n-1} \quad (0 \leq t \leq 1)$$

同様に Z の確率密度関数 $f_Z(t)$ を求めると、

$$\begin{aligned} P_r(Z \leq t) &= P_r(X_1 \leq t, X_2 \leq t, \dots, X_n \leq t) \\ &= \prod_{i=1}^n P_r(X_i \leq t) \\ &= t^n \end{aligned}$$

より、

$$f_Z(t) = nt^{n-1} \quad (0 \leq t \leq 1)$$

$$\begin{aligned} \text{(ii) } E(Y) &= \int_0^1 t \cdot n(1-t)^{n-1} dt \\ &= -t(1-t)^n \Big|_0^1 + \int_0^1 (1-t)^n dt \end{aligned}$$

$$= -\frac{(1-t)^{n+1}}{n+1} \Big|_0^1$$

$$= \frac{1}{n+1}$$

$$E(Z) = \int_0^1 t n t^{n-1} dt$$

$$= \frac{n t^{n+1}}{n+1} \Big|_0^1$$

$$= \frac{n}{n+1}$$

2. 大きさ n の標本平均 $\bar{X} = \frac{1}{n} \sum_{i=1}^n X_i$ をとると,

$\frac{\bar{X} - \mu}{\frac{\sigma}{\sqrt{n}}}$ は $N(0, 1)$ に従う。よって,

$$Pr\left(a < \frac{\bar{X} - \mu}{\frac{\sigma}{\sqrt{n}}} < b\right) = \frac{1}{\sqrt{2\pi}} \int_a^b e^{-\frac{t^2}{2}} dt = \alpha$$

となる a , b を定めると,

$$Pr\left(\bar{X} - \frac{\sigma}{\sqrt{n}} b < \mu < \bar{X} - \frac{\sigma}{\sqrt{n}} a\right) = \alpha$$

となり、信頼度 α の信頼区間は、

$$\left(\bar{X} - \frac{\sigma}{\sqrt{n}} b, \bar{X} - \frac{\sigma}{\sqrt{n}} a \right)$$

である。

ここで、区間の長さ $\frac{\sigma}{\sqrt{n}} (b-a)$ を最小にするため、

$$b = a + h(a)$$

とおき、

$$\int_a^{a+h(a)} f(t) dt = \alpha' \text{ (一定)} \dots\dots\dots(1)$$

$$\text{ここで } f(t) = e^{-\frac{t^2}{2}}, \quad \alpha' = \alpha\sqrt{2\pi}$$

を満たす最小の $h(a)$ を求める。

(1)式を a について微分すると、

$$f(a+h(a))(1+h'(a)) - f(a) = 0$$

$h'(a) = 0$ であるから、

$$f(a+h(a)) = f(a)$$

$f(t)$ は左右対称であるから $a = -b$ となるよう選べばよい。

3. \bar{X} を大きさ n の標本平均として、

$$P_r \left(|\bar{X} - \mu| \geq \frac{1}{4} \sigma \right) \leq 0.05$$

となるような n を求めればよい。

ここで $\frac{\bar{X}-\mu}{\frac{\sigma}{\sqrt{n}}}$ が $N(0, 1)$ に従うことと, (注) より,

$$P_r\left(\frac{|\bar{X}-\mu|}{\frac{\sigma}{\sqrt{n}}} \geq 1.96\right) = 0.05$$

となる。

よって,

$$\frac{1}{4}\sigma \geq 1.96 \frac{\sigma}{\sqrt{n}}$$

を満たす n を求めると,

$$\begin{aligned} n &\geq \left(\frac{1.96}{\frac{1}{4}}\right)^2 \\ &= 61.4656 \end{aligned}$$

よって, 62以上である。

4. 母集団メジアンを μ とし, y_r, y_{n-r+1} に対応する確率変数を Y_r, Y_{n-r+1} とするとき,

$$P_r(Y_r < \mu < Y_{n-r+1}) = 1 - \frac{1}{2^{n-1}} \sum_{k=0}^{r-1} \binom{n}{k}$$

となることを証明すればよい。

ところで,

$$P_r(Y_r < \mu < Y_{n-r+1}) = 1 - P_r(Y_r \leq \mu) - P_r(Y_{n-r+1} \leq \mu)$$

であるが, $Y_r \leq \mu$ となることは, n 個の観測値のうちで $n-r+1$ 個以上がメジアン μ より大となることを意味するから,

$$P_r(Y_r \geq \mu) = \frac{1}{2^n} \sum_{k=n-r+1}^n \binom{n}{k}$$

となる。また、 $Y_{n-r+1} \leq \mu$ となることは、 $n-r+1$ 個以上がメジアン μ より小なることであるから同様に、

$$P_r(Y_{n-r+1} \leq \mu) = \frac{1}{2^n} \sum_{k=n-r+1}^n \binom{n}{k}$$

よって、

$$\begin{aligned} P_r(Y_r < \mu < Y_{n-r+1}) &= 1 - \frac{1}{2^n} \sum_{k=n-r+1}^n \binom{n}{k} - \frac{1}{2^n} \sum_{k=n-r+1}^n \binom{n}{k} \\ &= 1 - \frac{1}{2^{n-1}} \sum_{k=n-r+1}^n \binom{n}{k} \\ &= 1 - \frac{1}{2^{n-1}} \sum_{k=0}^{r-1} \binom{n}{k} \end{aligned}$$

5. 母集団の確率密度関数は、

$$f(x; \mu, \sigma^2) = \frac{1}{\sqrt{2\pi\sigma^2}} e^{-\frac{(x-\mu)^2}{2\sigma^2}}$$

であり、尤度関数

$$L(\sigma^2) = \left(\frac{1}{\sqrt{2\pi\sigma^2}} \right)^n e^{-\frac{1}{2\sigma^2} \sum_{i=1}^n (x_i - \mu)^2} \dots\dots\dots(1)$$

を最大にする σ^2 の値を求めればよい。

$\sigma^2 = t$ とおき、(1)式の対数をとると、

$$\log L(t) = -\frac{n}{2} \log(2\pi t) - \frac{1}{2t} \sum_{i=1}^n (x_i - \mu)^2$$

ここで,

$$\frac{d}{dt} \log L(t) = 0$$

より,

$$-\frac{n}{2} \frac{1}{t} + \frac{1}{2t^2} \sum_{i=1}^n (x_i - \mu)^2 = 0$$

を得, これを解くと,

$$\hat{\sigma}^2 = \frac{1}{n} \sum_{i=1}^n (x_i - \mu)^2$$

となる。

次に,

$$\begin{aligned} E\left(\frac{1}{n} \sum_{i=1}^n (X_i - \mu)^2\right) &= \frac{1}{n} \sum_{i=1}^n E(X_i - \mu)^2 \\ &= \frac{1}{n} \sum_{i=1}^n V(X_i) \quad (V(\cdot) \text{ で分散を示す}) \\ &= \sigma^2 \quad (\because V(X_i) = \sigma^2) \end{aligned}$$

より不偏性が示された。